

山田政務官による基調演説(8分:日英同時通訳)

第21回日・EUビジネス・ラウンドテーブル(BRT)

(平成31年5月15日, 於:ブリュッセル)

ストーリーBRT共同議長,

さくやま
柵山BRT共同議長,

カタイネン欧州委員会副委員長,

御列席の皆様,

1 冒頭

本日の日EUビジネス・ラウンドテーブル第21回年次会合の盛大な開催を, 心からお祝い申し上げます。また, このような意義あるセッションにお招きいただき, 誠にありがとうございます。

日欧双方の経済界をつなぐ役割を果たしてきた日EUビジネス・ラウンドテーブル, そしてこの枠組みを率いておられるストーリー共同議長及び柵山共同議長の御貢献に, 改めて敬意を表します。

先ほど、カタネン副委員長から、日EUの将来に向けた力強いメッセージを頂きましたが、折しも、今年は、この会議の前身たる、日EUビジネス・ダイアログ・ラウンドテーブル設立から20周年です。また、日EU・EPA発効の年でもあります。

このようなタイミングで行われる本日の議論は、日EU間の貿易・投資の更なる増進や、世界のビジネス環境整備に向けた日EU協力のあり方に関する、重要な指針を提供するものと確信します。

2 世界が直面する課題

今、私たちは、変化と不確実性の時代に生きています。

情報通信技術は革命的な進歩を遂げています。IoT、ビッグデータ、人工知能、ロボット技術などにより、モノづくり、サービス、流通、貿易の全てにおいて劇的な変革が進行しています。

情報通信技術の発達により加速したグローバル化は、世界の一部において反発を生み、第二次世界大戦後の世界経済の成長を支えてきた政治経済体制が様々な方面から挑戦を受けています。

世界の経済成長と繁栄のために、国際社会の新たな均衡を見いだせるか、我々は真摯に向き合わなければなりません。

3 日EUが提供する処方箋

世界がこうした課題を抱える中、日本とEUは何をすべきなのでしょうか。今日、私は敢えて、めまぐるしく移り変わる目の前の濁流から離れ、歴史という大きな海流に焦点を当てたいと思います。

第二次世界大戦後の日欧関係は、貿易問題から始まりました。外貨獲得のため、日本は米国に次ぐ市場である欧州へのアクセスを求めて、積極的に貿易推進を図りました。こうした日本の動きに対し、欧州の多くは日本製品との競合に

懸念も有していました。1970年代に入ると本格的な経済摩擦の時代となり、これは1990年代前半まで続きました。

転換点は、1990年代です。冷戦の終焉、マーストリヒト条約採択による欧州統合の進展と、政治的、経済的構造が変化する中で、日欧双方が継続的な対話の場を制度化し、意識的に歩み寄る努力が進みました。1994年には、日EU規制改革対話が始まります。そして、その3年前、1991年に発出された日・EC共同宣言で制度化された定期首脳協議は、つい3週間前、その26回目を迎えました。

こうした制度化された対話を通じ、日欧の政策立案者の間で、日欧は共に先進国であるのみならず、政策の方向性も近く、更には基本的価値も共有しているとの認識が進んだのです。そして、成熟した民主主義の同志として、協力の道を探り始めることになったわけです。

この歴史的文脈に照らせば、これから日本とEUがすべきことは、自ずと明らかです。それは、モノやサービスの貿易・投資促進、産業規制、適合性評価手続、貿易と持続可能な開発、農業政策等、日EU・EPAという国際約束のもとで制度化されたあらゆる経済的側面に関わる政策協議の場を通じ、世界が直面する課題への解決策を議論し、国際社会に提示していくことです。

先月10日、日EU・EPAの第1回合同委員会が滞りなく開催されました。今後、専門委員会での議論を重ね、双方の政策当局が互いに知恵を出し合っていく過程が始まります。また、先月25日の日EU定期首脳協議では、双方の首脳が両者の更なる協力関係を力強く宣言したことも記憶に新しいところです。カタイネン副委員長が共同議長を務める日EUハイレベル産業・貿易・経済対話も、この日EU協力に強力なモメンタムを与えてくれることでしょう。

本年6月にはG20が大阪で開催されます。

議長を務める安倍総理は、現在世界が直面する様々な課題、たとえば総理が提唱しているDFFT (Data Free Flow with Trust) に基づく「大阪トラック」の立ち上げや WTO の改革などに、トウスク議長及びユンカー委員長の理解と協力を得て、共に取り組んでいく考えです。日EUの共通の価値観に基づく、「beyond EPA」の世界的貢献がまさに始まろうとしています。

4 最後に

カタイネン副委員長及び両共同議長、

河野太郎外務大臣の祖父河野一郎氏は、1960年頃、欧州歴訪から帰国して、こう述べたそうです。

「EECに真剣に注目すべきである。」「独仏も過去の対立を乗り越え、政治的に一つの共同体を目指すに違いない。」

それから約60年が経った今、益々強化された日欧協力

の果実を享受できることを、大変光栄に思います。今後の更なる発展を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。御静聴ありがとうございました。

(了)